

## 第5章 森林・山村多面的機能発揮対策普及セミナーの開催

地域協議会及び活動組織へのアンケート調査、ヒアリング等の結果を踏まえて、他地域の活動の参考となる取り組みを行っている地域協議会と活動組織を抽出し、その成果を関係者で共有することを目的としたセミナーを開催した。

### 5-1 セミナーの概要

項目	内容
目的	他地域の地域協議会、活動組織の参考となる汎用性の高い取り組みや、課題解決の方策等の共有
対象	地域協議会、都道府県の交付金担当者など
開催日時	平成29年2月7日（火）10:00～15:00
会場	日本橋社会教育会館 8階ホール（東京都中央区）
プログラム	<p>10:00～10:05 開会挨拶</p> <p>10:05～10:55 基調講演 『愉しくてためになる市民参加型調査「森の健康診断」の10年』 豊田市矢作川研究所 主任研究員 洲崎燈子</p> <p>10:55～11:05 休憩</p> <p>11:05～12:30 活動組織による活動事例報告（3団体）</p> <p>11:05～11:30 しらたか森づくりの会（山形県）</p> <p>11:30～11:55 NPO法人 自然とオオムラサキに親しむ会（山梨県）</p> <p>11:55～12:20 NPO法人 時ノ寿の森クラブ（静岡県）</p> <p>12:20～12:30 全体質疑</p> <p>12:30～13:30 昼休み</p> <p>13:30～15:00 パネルディスカッション コーディネーター：山本 信次（岩手大学 農学部 准教授） パネラー：丹羽 健司 （特定非営利活動法人地域再生機構 木の駅アドバイザー） 伊藤 道男（千葉県里山保全整備推進地域協議会 事務局長） 小畠 信継（（公社）京都モデルフォレスト協会 次長） 岡田 恵美（木の国協議会 事務局長） 木下 仁 （林野庁森林整備部森林利用課山村振興・緑化推進室 室長）</p> <p>15:00 閉会</p> <p style="text-align: right;">（敬称略）</p>

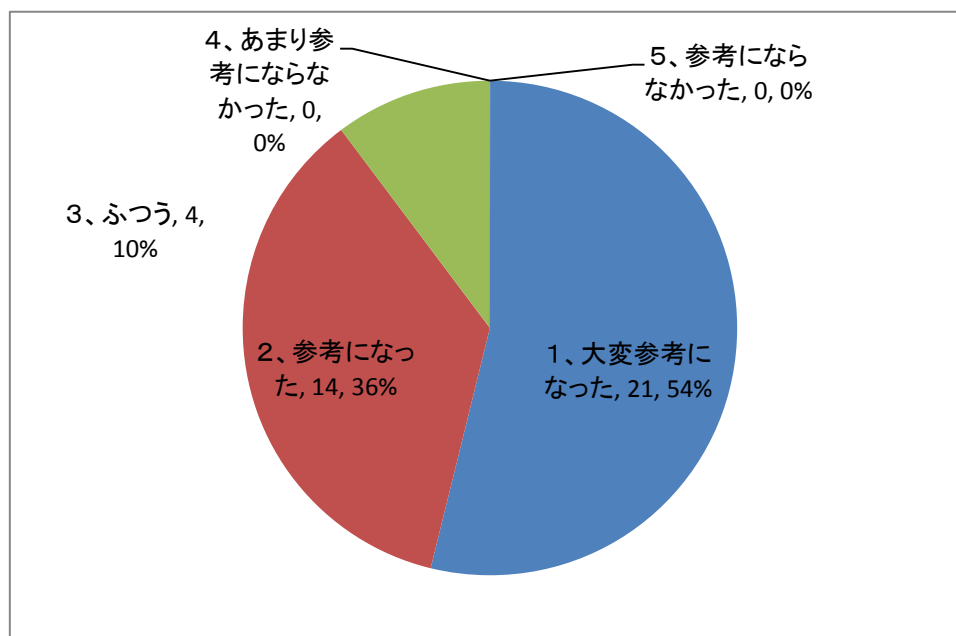
参加者	96 名
	都道府県担当者 : 32 名
	地域協議会担当者 : 41 名
	活動組織 : 5 名
	検討委員・基調講演 : 3 名
	その他 : 15 名 (スタッフ含む)

セミナーの開催に際しては、全参加者にアンケート（選択式回答 3 問、自由記述回答 1 問）を実施した。集計結果の概要を以下に示す。

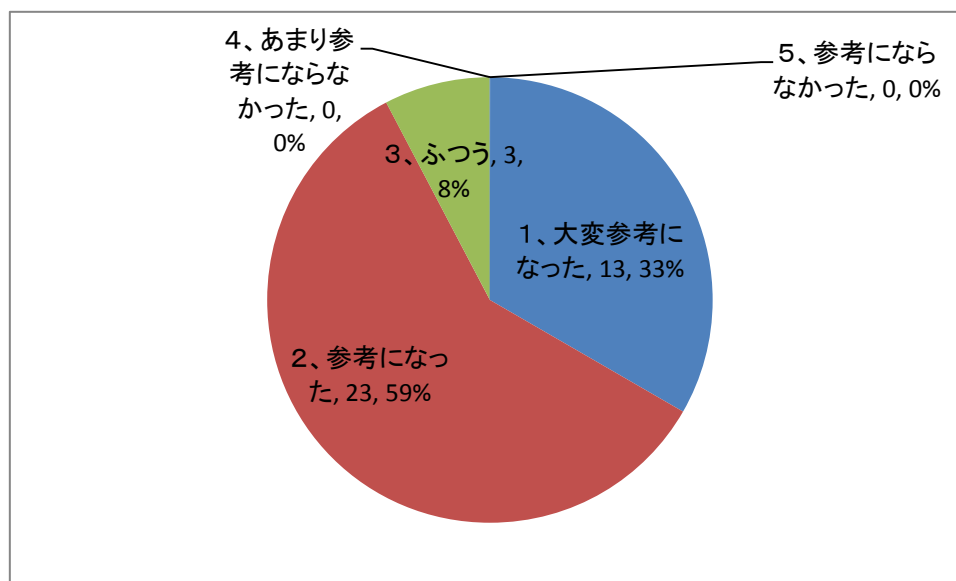
〔配布方法〕 配布資料とともに当日会場にて配布

〔回答数〕 39 通

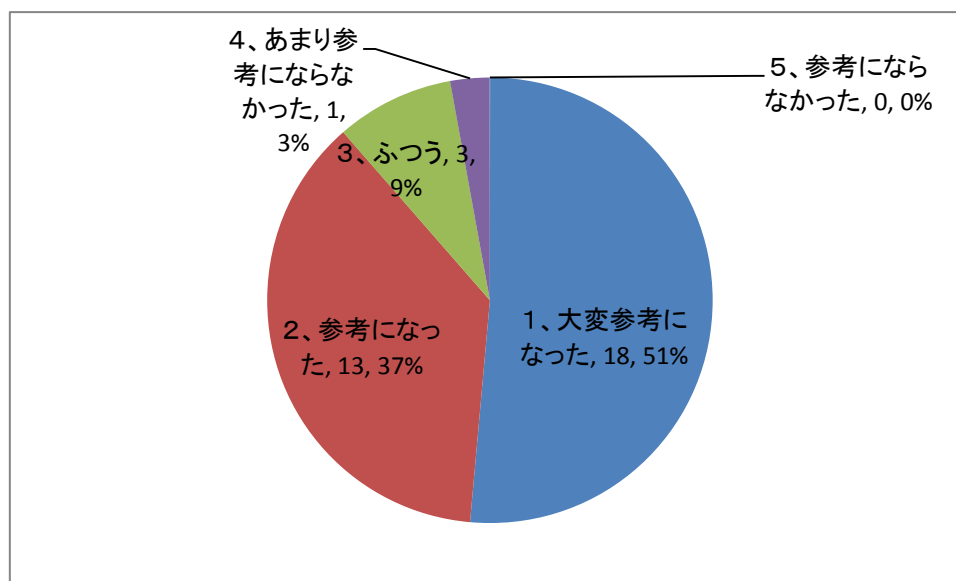
**Q1 : 「基調講演 『愉しくてためになる市民参加型調査「森の健康診断」の 10 年』（豊田市矢作川研究所主任研究員 洲崎燈子）の感想を教えてください。**



Q2 : 「活動組織による活動事例報告」の感想を教えてください



Q3 : パネルディスカッションの感想を教えてください



## ■開催風景



### 基調講演

豊田市矢作川研究所 主任研究員  
洲崎燈子氏



### 活動組織発表 1

しらかば森づくりの会



### 活動組織発表 2

NPO 法人 自然とオオムラサキに親しむ会



### 活動組織発表 3

NPO 法人 時ノ寿の森クラブ



### パネルディスカッション



## 5-2 森林・山村多面的機能発揮対策普及セミナーの要旨

### ■開会挨拶（10:00～10:05／5分）

木下 仁（林野庁森林整備部森林利用課山村振興・緑化推進室 室長）

（要旨）

- ・ 約 2,000 団体以上の活動組織が全国各地で里山林の整備活動を実施し、活動も活発になってきた。
- ・ 平成 29 年度以降も事業を引き続き実施をしていくということで進めているが、昨年 6 月の行政事業レビューの公開プロセスにおいて、厳しい指摘を受けている。そのため、予算規模について減額となるとともに、色々な見直しをするよう言われている。より効果的な事業にしていかなければならない。

### ■基調講演（10:05～10:55／50分）

タイトル：『愉しくてためになる市民参加型調査「森の健康診断」の 10 年』

講演者：豊田市矢作川研究所 主任研究員 洲崎燈子

（要旨）

- ・ 「森の健康診断」を行うことになった経緯について
- ・ 「森の健康診断」では、植生調査と混み具合調査を実施する。
- ・ 「森の健康診断」により、10 年間で、のべ 2,324 人により 3 県 7 市町村の 610 地点を調査した。
- ・ 「森の健康診断」の結果、断面積、相対幹距、林分形状比から総合的に判断して、矢作川流域の人工林の 5～8 割が過密で、現時点で間伐が必要なことがわかった。
- ・ 人工林の公益的機能の指標となる草と低木、落葉層と腐植層の被覆率は、植栽木密度が高くなると下がった。また、標高が上がることによっても低くなった。
- ・ 森の健康診断の成果として、2007 年に策定された愛知県豊田市の豊田森づくり条例では、2005 年の第 1 回の健診結果に基づき間伐の目標面積が定められたことや、一般市民が行える人工林調査として 40 都道府県以上に広がったことが挙げられる。

■活動組織発表（11:05～12:30／85 分）

発表団体 1：しらたか森づくりの会〈山形県〉

（要旨）

- ・ 地域住民を担い手として、災害に強い健全な森や木材利用のできる森づくりを目指して活動を行っている。
- ・ 施業技術を身につけるための講習会の開催や、地元の先人の知恵と経験を受け継ぐための選木講習会を実施した。
- ・ 今後の課題として、整備した森林の継続的管理と育成、間伐材の利活用の促進と多様化、若い担い手の育成が挙げられる

発表団体 2：自然とオオムラサキに親しむ会（山梨県）

（要旨）

- ・ 地域環境保全活動タイプにより、管理放置及び植樹地の下刈面積は、平成 28 年度で約 30ha 超に達している。
- ・ 森林資源利用タイプは毎年 1ha 実施し、薪、キノコのほだ木、炭の生産に役立てている。販売収益もあげている。
- ・ 教育・研修活動タイプは 5～10 回実施し、里山林の認知度を高めている。

（質疑）

Q. 炭や薪を売ってあげた販売収益について、土地の所有者との協定はどのようになっているか。また収益があった際の、所有者への還元はどのようにしているか。

A. 所有者との協定においては、里山の手入れにかかる一切の費用は私どもの NPO で負担するという取り交わしている。出た財についても、私どもの NPO に一切を任せる旨の委任状を一筆いただいている。

発表団体 3：時ノ寿の森クラブ（静岡県）

（要旨）

- ・ 廃村になった村では山が荒れ果て、森は真っ暗、川の水は半減と深刻な状態となった。山をこのまま後世に引き継げば、大きなツケを残すと考え、活動を始めた。
- ・ 時ノ寿は、急峻な地形、所有者が不在の村。所有者の財産管理が崩壊している日本のモデルケースといえる。森林の公益的機能は社会全体で守る必要がある。
- ・ 2006 年に任意団体を結成し、2010 年に NPO 法人となった。
- ・ 将来の目標としてマニフェストを作成した。2020 年の森づくりの目標を描いた夢マップも作成している。

## ■パネルディスカッション（13:30～15:00／90 分）

コーディネーター：山本 信次（岩手大学 農学部 准教授）

パネラー：丹羽 健司

（特定非営利活動法人地域再生機構 木の駅アドバイザー）

伊藤 道男（千葉県里山保全整備推進地域協議会 事務局長）

小畠 信継（（公社）京都モデルフォレスト協会 次長）

岡田 恵美（木の国協議会 事務局長）

木下 仁

（林野庁森林整備部森林利用課山村振興・緑化推進室 室長）

### 議題 1：本交付金を活性化させるための地方自治体等との協力について

（木下氏）

- ・ 平成 25 年度から事業を始めてようやく活動として回るようになってきたものの、性善説に立ちすぎたゆえに行政事業レビューにぶつかった部分があったかもしれない。レビューの中でも出たのは、どういう団体に優先順位をつけて交付すべきか、効果的に実施するための仕組みがつくられているかという話であり、自治体が実施すべきという意見も出た。
- ・ 市町村との連携については、ニーズに即したものにするために事前に市町村と協議をして活動内容の有効性を市町村が確認する仕組みを設けることにより、ある程度の関与をはたかせようと考えている。

（小畠氏）

- ・ 地方自治体との協力について、今のところ財政面での支援はない。平成 28 年度から京都府で森林環境税をとるようになり、これによるカバーを検討しているが、どちらともいえない状況が続いている。
- ・ 人材育成なりフィールドづくりなりで府と連携をとりながら進めている。市町村について、交付金を使った活動を 19 ほどの市町村で行っているが、積極的に取り組みに関わっているのは数市町村にとどまる。

（岡田氏）

- ・ 地方自治体について来年度からの財政的な支援は、今のところない。
- ・ 募集をかけるときの広報で協力を得ている。森林ボランティアや林業研究グループ、県木炭協会などに県が働きかけて、交付金があることをお知らせしている。

（伊藤氏）

- ・ もともと様々な支援を行っているということもあり、この事業に限らず、県とは全面的に連携し、協力を得ている。

- ・ 市町村との関係では、この事業の申請段階や実施報告の段階で市町村のチェックを経由するルールをつくっている。市町村によっても温度差はあるが、だいぶ助かっている。

(丹羽氏)

- ・ 申請時に市町村を経由したり、市町村が現地確認に同行したりしている事例は少数ではないのではないか。
- ・ 全国の活動グループから質問があるが、皆が心配しているのは二つ。一つは優先順位の問題で、もう一つは、交付金を前提に活動してきた人は補助を受けられなくなったから活動できなくなるのではないかという心配である。

(山本氏)

- ・ 使い勝手のよさがこの交付金の売りの一つであるが、同時に、一歩間違えると何のためにもらっているのかという点が曖昧になってしまう。今回のように外からの目が入ったときに、それについて答えられるようなお金の託し方を考えるのが大事である。

(木下氏)

- ・ 役人の考え方では、ずっと補助をしていくということはなかなかできず、あくまでも自立を支援することが目的である。使い勝手がよい一面、何のためにやっているのかということは常に問われてくる。どんな意図でどんな形の活動をしていきたいのかということを問うている段階にきている。

(小畠氏)

- ・ 0.1haのような小規模の団体もある。そうしたところに対して、自立できないのであれば交付金は渡せないと言うのではなく、森林整備が進むのだから時間がかかってもサポートするのが我々の役目だと思う。すぐに結果を求められるのがつらい。もう少し長い目で見ていただければと思う。

(山本氏)

- ・ (交付金)依存症にならないようにするために色々な考え方はあると思うが、社会に対して説明のできるお金の出し方をこちら側から提案していかなければならないし、形式も整えていかなければならない。そのための一つの形が、自治体との連携だという部分もある。

(会場意見)



- ・ 小さくまんべんなく出すことは否定しないが、次に目指すビジョンを明確に持っているところに対してお金をいかに使うかという評価を、この交付金においても今後はしてほしい。自立したところは支援しなくてもよいという問題ではないと思う。
- ・ 交付金を活用した結果、放置された里山の景観がよくなり、まち全体がきれいになっていくということは市民が見ているわけで、それについて云々言うということ自体納得がいかない。また、保険加入や機材購入に際して、どうしてもお金は必要になる。交付が止まらないようにお願いしたい。

（山本氏）

- ・ EU では、条件不利地域に対して EU が直接所得を補償する。二種類あり、その場で伝統的な農林業をやる限り出されるお金と、その地域で暮らしていくための新しい工夫（特産品の開発、環境教育制度の創設等）に対して出されるお金とがあり、段々と後者の比率を上げてきている。健全な農山村地域社会を残していくためには社会全体で負担するのが必要だというのが EU の合意である。

（丹羽氏）

- ・ ヒントは楽しさということである。どれだけ成果が出たかということではなく、安全にやる山仕事はこんなに楽しいのだということを活動する人が味わうことが大事である。

**議題 2：安全対策をどのように確保していくか**

（伊藤氏）

- ・ 協議会としては、大径木の伐採講習を 3 回行った。広葉樹が放置されてかなり太くなって、切らざるをえない木がある。毎回定員を 5 組（1 組 2～3 人）にして、各組 1 本ずつ太い木を伐採してもらった。やってみると色々なことが分かる。講師の方にもベテランの天狗の鼻をへし折ってもらった。少しは安全に対して気持ちも新たになったのではないかな。

（岡田氏）

- ・ 取り組みとしてはまだできていない。県で行っている講習会や現場へ派遣する講師の紹介を行っている段階で、来年からは活動団体がそれを行わなければならないので、講師の派遣への協力はしていこうと思っている。

（小島氏）

- ・ 林業大学校による講習会があるが、そのほかに協議会が年に 1 回、活動組織団体を集めて安全講習会をやっている。平成 28 年では林災防の安全インストラクターを呼んでチェーンソーの使い方の講習や、暑い時期のへビに関する注意を受けている。活動組織の参加率は年々低下してきている。

(丹羽氏)

- ・ 先輩に対して「それは危ない」と言えない関係をグループの中でつくってはいけない。また、レスンプロをきちんとした報酬で引っ張ってることが大事である。そうしなければレスンプロが育たない。教えることを前提にやっていくと本当の安全を考え始めるようになる。本物に触れさせていく機会を固定化させていければよい。

(木下氏)

- ・ 今回、安全講習や技術講習を義務付ける形とした。この事業の活動でも既に事故は起こっている。そもそも林業自体、他の産業と比べて 10 倍以上死傷率がある。大径木も増えてきているし、里山では人工林と全く違った環境のなかで枯れ枝も多く、プロでも正しい判断が難しい場合がある。防げたはずの事故を起こさないということを、情報の共有も含めてやっていかなければならない段階にある。